

文学作品は地理学の研究対象たりうるか。文学と地理学の関係はいかにあるべきか。人文主義地理学の台頭などとともに、議論がさまざまに展開されているようである。また、杉浦芳夫編『文学人 地域—越境する地理学』のように、文学と地理学の間架橋が試み始められている。

残念ながら私には、文学と地理学の関係を論じる能力もなければ、これから追求しようという意思も時間もない。しかし、文学と地理学を関連付けようという運動には関心をもっている。

東京都の近代文学博物館では、文学作品や作家の遺品などの展示のほか、近代文学の作品に縁の深い場所を巡るツアーも実施している。副都心渋谷の近くで便利なわりに博物館は入館者で賑わってはいないが、ツアーのほうは人気が高く、参加希望者が多数集まる。

旅やツーリズムは地理学の一部門であるが、それはさておくとしても、文学—地理—ツアーと結びつけば、地理学の普及に役立つことは確実であろう。地理学でなくても、趣味の地理として、文学、旅、地域を楽しむことができる。地理学の地盤沈下が憂慮されているおり、地理の普及拡大に地理学者がもっと努力すべきではなかろうか。いや、努力というより、地理学的知識を背景にしながら、ふつうの感覚で皆と文学や旅を楽しんでよいのではなかろうか。

文学の代わりに、音楽、旅、地域も趣味の地理として楽しむことができる。

昨秋、求龍堂から出版された齊藤民雄氏の画集「私のモーツァルト紀行」は、それに美術も加わって、立体感のある知的趣味を満足させてくれる。

モーツァルトは、ヨーロッパ中を、生涯に18回も大旅行した、当時の人としては異例な旅人といわれている。モーツァルトについては十分に研究されており、わが国でもかなりの数の図書が出版されている。主な旅行地を写した写真集も刊行されている。

私のモーツァルト紀行は、絵とエッセイでユニークに構成されている。正確には画集ではなく画文集である。モーツァルトが生れたザルツブルクの5枚、長く住んだウィーンの7枚のほか、彼の交響曲の名にもなっているリンツ、プラハを始め、パリ、ロンドンや、北はベルリンから南はナポリまで、モーツァルトが訪問して演奏した主要都市1枚ずつ、計44枚描かれている。齊藤氏はウィーンに住むこと二十数年、卵テンペラと油彩の混合技法を用いてこれらを描いた。エッセイは、齊藤氏の作品を所有している各界の著名人が、彼女ら自身それぞれのモーツァルトとの関わりを述べたものである。全編すべて、齊藤エベリン夫人によるドイツ語の対訳が付けられている。

私のモーツァルト紀行によって、モーツァルトのヨーロッパに思いを馳せ、華麗な音と光のイメージ空間に遊ぶことができる。モーツァルトとヨーロッパ文化の愛好者の喜びが増す一冊である。